

「最も小さな者よりも小さい」

エペソ人への手紙 3 : 8 - 9

October.23.2022

### エペソ人への手紙 3 : 8 - 9 (パウロ)

#### Preface

先週は、恵みが恵みと思え、キリストにあるすべてのことが測り知れない富だと思えるようになるためには、使徒パウロがそうであったように、私たちが自らを「最も小さな私」と称するところへと導かれて行くんだということについてお話し致しました。

そして今朝は、この「最も小さな私」と訳されている言葉が、実のところ、ギリシャ言語の意味合いからしますと、少し弱められて日本語に訳されているということから御言葉を考えていきたいと思っています。

「最も小さな私」と訳されている言葉を文法的に見ますと、二重比較級という表現方法が用いられていて、直訳しますと、「最も小さな者よりも小さい私」という風になります。

「最も小さな私」というだけでも、相当な遜りがそこに表れていますが、「最も小さな者よりも小さい私」となりますと、自ら取るに足りないどころか、取るに足りなく足りなく足りないという日本語の表現としておかしくなってしまうのですが、日本語で言いますとそういう風に言っているぐらい、自分のことを低い者と表現します。

こんな風にパウロが自分のことを表現するには、大きな理由がありました。それは、パウロの過去の生き方です。

神のためだと神の名を掲げてはいたものの、とんだ見当違いで、その本質は自分自身の熱心さへの陶醉であって、結果的に、非道で残忍で、慈悲も哀れみも無いことを働いてしまったという過去の生き方が、「最も小さな者よりも小さい私」とパウロ自身のことを言わしめました。

じゃあ、その過去とは何なのか？

イエス・キリストを信じる者たちを率先して、先頭を切って迫害し、取っ捕まえ、殺害していたということです。

その中でも、聖書にはっきりと記されている代表的な事件が、ステパノの殺害・ステパノの殉教です。

#### Part One

### 使徒の働き 7 : 54 - 8 : 3 (パウロ)

## 使徒の働き 9 : 1 - 2 (パウロ)

これが新約聖書の半分以上を書き記した偉大な伝道者、使徒パウロの過去の姿です。

自ら、誰よりも熱心に神様を信じていると思ひ込み、神様のために生き、人様のために生きています、イスラエル民族の代弁者だと自負していました。

聖書信仰を守ろうと、聖書に則った生き方を全うしようと、聖書に反することをしている者たちを批判することに留まらず、片っ端から取っ捕まえて殺害をしようと熱心に働いていました。

ところが、それが全くもって神に反することであり、見当違いであり、聖書に則ったことでもないということが、主イエス様に会って明らかになってしまいます。(続けて3節を読みます)

## 使徒の働き 9 : 3 - 9 (パウロ)

こうなってみて初めて、パウロは、自分がとんでもないことをしてしまったということに気付かされました。

私たち人間皆、罪人であるがために、行くところまで行ってみないと分からない、気付かない、顧みない、悔い改めないという属性を持っています。

我が家の長男がやつとよちよち歩きを始めた頃、実家に長男を連れて遊びに行った時の話ですが、そのもの自体が何なのかはつきり覚えていないのですが(たぶん電気ポッドだと思うのですが)、沸騰して熱い蒸気が出ているところに、よちよち歩きをしていた長男が手を置いてしまったんです。

まあ、大変ですよ。

親である私たちも、お爺ちゃんお婆ちゃんもびっくりして心痛みましたが、当の本人が一番大変ですね。

火傷をしてみても初めて「そこに触れちゃいけないんだ」と、二度とその熱い蒸気の出るところへには当然のように行かなくなりました。

旧約聖書を見ますと、そういう話が、7,800年というものすごく長いスパン・歴史をかけて描かれていることが見えてきます。

父なる神さまが、子なるイスラエルの民たちに、「こっちに行ったら大火傷するから、絶対にこっちの方に行ってははいけません！ これを手にしたら大怪我するから絶対に持つようなことがあってはいけません！ 大火傷しないように、大怪我しないように、神の言葉に依り頼みながら、全神経を集中させて注意を払いなさい！」と何度も、丁寧に、分かりやすく教え諭すのですが、どうしても火傷する方へと行ってしまいます。

どうしても大怪我する方へと行ってしまいう衝動を抑えきれずに、そっちの方

に行ってしまいます。

### 申命記 8 : 5 - 20 (パウロ)

苦しいことがあっても、試されるようなことがあっても、はたまた、物質的に豊かに満たされるようなことがあっても、主なる神様を忘れ、神の言葉である聖書の言葉をないがしろにして生きてはならないとこれだけ言っても、また同じようなことを、他の箇所でも何度も丁寧に言っても分からない、教えても分からない、諭しても分からないならば、神様は「では仕方ありません。実際に火傷を負い、怪我をしてみても分かりなさい」と、自分自身の罪深さと対面するようところに置いておられます。

そうして、私たちが実際に火傷を負い、怪我をしてみた時、真っ先に思い浮かんで来るのが、「何で神様は、こうなる前に防いで下さらなかったのか？ 何で、こんな風になってしまうまで放っておかれるのだろうか？ 守ってくださる神なんじゃないのか？ 神様って本当にいるのか？」という事だと思います。

でもそうならみないと、事の深刻さに気付けない、もっと言いますと、そうなら見ても事の深刻さどころか、自らの正しさを反芻しながら他者のせいにし、神様のせいにしてしまいます。

御多分に漏れず、使徒パウロも、そういうところまで行ってみないと分からなかった、そこまで行ってみて、初めてうんともすんとも言えないぐらいの降参降伏をすることが出来た。

そうして出て来た告白が、先週見ましたローマ書 11 : 33 のような御言葉です。

### ローマ人への手紙 11 : 33 - 36 (パウロ)

#### Part Two

アーメンです。

だからイエス様は、私たちに「そう簡単に判断を下しても行けないし、裁いてもいけない！」と仰るわけです。

そのことが、どのように用いられ、何のためにそうになっているのかを、私たちが判断するのには、あまりにも短絡的で、浅はかだからですね。

使徒パウロの過去は、クリスチャンならばなおさら消し去りたい過去ですし、出来るならばそっとしておいて欲しい隠し続けたい過去ですが、隠しようにも隠せないぐらいどこに行っても知られているぐらい有名な程の残忍さで、見当違いな神への熱心の持ち主だったその過去が、神の前には当然、人の前であっても、自分自身の前であっても、「最も小さな者よりも小さい私」という言

葉を口にせずにはいられない神の導きの奥深さへと、恵みへと彼を導きました。

もちろん、だからと言って、人を傷つけていいとか、何でもいいからどんな事でも善悪顧みずにやってみなさないという事ではありません。

悪いことは悪いことですし、やっちゃいけないことはやっちゃいけないですね。

でも、神のご介入があると、恵みになってしまうんです。

神様のご介入があったからこそその恵みです。

神のご介入があったからこそ、パウロの過去がパウロのような存在が、パウロ自身ばかりか、人々にとっても、世界にとっても、後の世代現代に至るまで、とてつもなく多くの人々にとって慰めとなり、癒しとなり、安心して救いへと導かれていいんだという平安を与えてくれました。

なので、私たちに出来ることは、やっちゃいけないことをやらずにはいられない衝動が私たちの内に巣食っているということを、時に適って神に示された時、それを認め、それでも赦されるという私たちの倫理道徳的・常識的範疇を遥かに超える神の恵みの前にひれ伏し、「最も小さな者よりも小さな私」と告白するだけです。

悪事を正当化するのではなく、神というお方の理解を超えた測り知れない恵み深さ、知り尽くしがたさ、極めがたさに圧倒されるだけです。

神様は、他者の命をも犠牲にした忘れることの出来ない過去の苦い経験をもってしても、その恵みの底なし具合を悟らせ、キリストこそ測り知れない富だと思えるように造り替えてしまうんです。

そうして、そんなパウロの口から、「罪の増したところに、恵みがなおいつそう満ち溢れる」と、ローマ書5：20のような言葉が突いて出てくるわけです。

(ローマ書の3章、5章を家に帰りましたら、読んでみてください)

私たちの目には不必要に思えるようなことが、消し去りたいと思えるようなことが、人を一人、神の御前に聖なる傷のない、イエス・キリストにある神の子とするために必要なものだったと、神が益としてくださったということです。

### Part Three

今、早天祈祷会で創世記を学んでいるのですが、先週からヨセフの話の箇所へと入っていきました。

ヨセフの出世物語については、私たち比較的よく知っている聖書の話だと思えますが、そのヨセフの物語が始まる最初の始まりの言葉が、ちょっとう意味深な感じなのを皆さんご存知でしょうか？

明らかにこれから結構な長さでヨセフの話が展開していくにも関わらず、そのヨセフのヒューマンヒストリーを「これはヨセフの歴史である」とは言わずに、「これはヤコブの歴史である」と言うんです。

### 創世記 37 : 2 (パウロ)

ここからヨセフの話が始まって、結局、創世記の最後の最後までずっとヨセフの話が続きます。 創世記最後の最後 50 : 26 には、

### 創世記 50 : 26 (パウロ)

という風に、37章から始まったヨセフの話をヨセフの死をもって終わらせ、そして創世記を終わらせます。

なのに、このヨセフの物語の題名が、「これはヨセフの歴史である」ではなく、「ヤコブの歴史である」と言うんです。

意味深げです。

ヨセフに起こったあの立身出世に至るまでの話は、ヨセフの話ではなく、すべてヤコブのために神様が興した歴史であると言うんです。

聖書の中には、たくさんの「え、何でこんな人が神に選ばれ、神の人として歩み、クリスチャンとして生かされたんだらう？」というような人が、パウロを含め結構たくさん出てきますが、ヤコブは、ある意味その代表格かも知れません。

生まれる前から兄の足を引っ張る強欲者で、嘘つきで、神からの恩を忘れてしまうような人ですが、神様は、そんなヤコブを選び、そのヤコブからダビデを生まれさせ、イエス・キリストをヤコブの血筋から誕生させました。

私などは、ヤコブよりもよっぼどエサウの方がさっぱりしているし、2度も自分のことを騙し殺意を抱く程に憎かった弟を赦し、涙を流しながら抱きしめ、20年ぶりに会った弟の健康とその家族の安否を気遣うエサウの方が、よっぼど神に選ばれるに相応しいように思えてしまうんですが、神様はそんなエサウではなく、ヤコブを選ばれるんです。

じゃあ、いつお選びになったのか？

ヤコブとエサウが生まれて来てから、「ああ、私の目にはエサウよりもヤコブの方がかわいく見えるし、鍛えがいがあからヤコブを選ぼう」という風に、後天的に選ばれたのか？

違いますね。

### ローマ人への手紙 9 : 11 - 16 (パウロ)

ヤコブの選びは、ヤコブが生まれてから、ヤコブがどう生きたのか、どういう人だったのか、どう努力し、どういう行いをしたのかに一切関係なく、生まれもせず、善も悪も行わないうちに、すでに神様はヤコブを選ばれたというのです。

つまり、ヤコブが母の胎内にいた時から兄の足首を掴むことをもって人間の持つ本能的な食欲を表したのも、兄エサウを騙し、兄を騙したことによって家族を決定的に引き裂いてしまったことも、また叔父ラバンのところで今度は自分が騙されるという苦虫を潰すような経験も、一人娘であるディナが強姦されてしまうという親として考えたくもない経験をしたにもかかわらず、なお物欲のために傷ついた娘に寄り添えなかった姿も、兄弟の中で唯一の女兄弟であるディナが強姦されたことに怒った兄たちが、強姦した一族どころかその町の男全員を騙して虐殺してしまうというとんでもないことをしでかした息子たちの父親としても、そして、13人兄弟の中で最も愛したヨセフが、兄たちの嫉妬心を買って奴隷に売られた事実も知らずに死んだほうがよっぽどマシだと思ってしまうような悲しみに伏せたことも、それすべてが、神様がヤコブを選ばれたから起こったことでした。

良いことも悪いことも、神様がヤコブを選ばれたから起こったことでした。

そしてついには、その顔を見ることさえもはばかられる程に人々から神同然のように崇拜されていた時の権力者エジプトのファラオに向かって、とんでもないことをしでかすほどに、神しか知らない者へと変えられていきました。

### 創世記47：7－10（パワポ）

エジプトのNo.2となっていた息子ヨセフに連れられてファラオの面前へと出て行ったヤコブが、有ろう事か、神だと人々から思われているファラオを祝福してしまいます。

そんなことあってはならないことですし、無礼失礼極まりないことであって、息子のヨセフと一緒に居なければ即座に切られてしまってもおかしくないほどの無作法でいけ図々しい行為でした。

当時の世界観からしますと、ファラオ以外の人間は皆、ファラオからの祝福ゆえに生かされている存在であって、一介どころか、どこのどいつかも良く分からない羊飼いやから祝福を受けるなんてことは、あってはならない大事件でした。

すぐ隣でヤコブのことを支えていただろうヨセフでさえも、冷や汗がタラ〜ッと流れるようなことをヤコブがするんです。

そんなヤコブに、ファラオは何とか怒りを抑えてなのか、呆れかえってなのか、「一体全体、お前は何年生きたからと言ってそんな訳の分からないことを私に

するのだ」と尋ねると、ヤコブは「私は130歳ですが、私の父イサクやお爺ちゃんアブラハムが天の御国で永遠のいのちを享受しながら、まことの祝福を得ていることに較べれば、どうってことありません」と、神だと人々から崇められ、自らもそう思っているファラオに、やんわりと伝道をして、最後にまた畳み掛けるように、ファラオを祝福してその場を立ち去っていきます。

#### Part Four

これが、神に選ばれた者が、神の御手によって変えられていった姿です。神様は、ヤコブが生まれるずっと前から選び、ここまでヤコブを聖なる神の子へと造りかえて行きました。もちろん、神の子としての完成はこの地上で起こるものではなく、天の御国で、また主イエス様の再臨と共に主イエスを信じる者たちに起こることです。

このような神の御手を描くために、創世記は「これはヨセフの歴史である」とは書かずに、「ヤコブの歴史である」と書くんです。

私たち人間の底の浅い正義感や常識や倫理道徳では到底計りきることなんか出来ない、底知れぬ神の義、底知れぬ神のご計画、底知れぬ神の御手、底知れぬ神の導き、底知れぬ赦し、底知れぬ寛容、底知れぬ恵みが、キリスト者の上に現在進行形でなされていることを、聖書の読み手に伝えようとしているんです。

このことを使徒パウロは、エペソ書でこう言います。

#### エペソ人への手紙1：3－5（パウロ）

私たちの考える祝福は、たかだか病気が癒されるとか、物事上手くいくとか、所有が増えるとか、ちょっとマシなものは、私たち人間が正義だと主張する正義だか何だか良く分からない正義じみたものが具現化する事とか、まあそんな程度に祝福を狭めてしまっていますが、聖書の教える、そして、神様がイエス・キリストを通して成そうとしておられる祝福は底知れません。

その底知れなさのほんの僅かでも実感させていただくために、私たちが導かれている信仰的境地が、「最も小さな者よりも小さい」というところです。

#### Conclusion

#### エペソ人への手紙3：9（パウロ）

神様が実現なさろうとしている奥義とは、キリストにあってすべての者が一つに集められることだと、2週前の礼拝でお話し致しましたが、その中心には、世界の基の置かれる前から聖なる傷のない神の子にしようと選び出された私たちキリストにある聖徒たちがいます。

このキリストにある聖徒たちをどう変えるのかという結論は私たち分かっていますが、どのような方法を用いて変えなされるのかということについては、私たちには分かりません。

その方法は、私たちの作りだした常識や正義感からは大きく逸脱したものかもしれません。

そんな馬鹿なと思う方法かもしれません。

裏切りや不誠実や不当なことかもしれません。

もちろん、私たちの目に良いと思えることもあるでしょう。

ただここで、私たちが覚えておかなければならないことは、その方法については分からないけれども、結果は分かっているということです。

栄光の結果が約束されているということです。

だから私自身、自分が神になって、他者を裁いたり、判断するくなんてことは辞めたいと思うのですが、裁いてしまいます。

牧師だか何だか知らないですが、バッサバッサと自分の中で裁いてしまっている自分自身を日々発見します。

だから、ヤコブのような事が、パウロのような事が、私の身にも起こっているんだということを遡りつつ、まず自覚出来るよう、毎日、聖書の御言葉を通して、祈りを通して、人と接することを通して、すべての礼拝を通して教え諭されています。

それでも、砕かれない頑固な心。

それでも決して諦めることなく、ヤコブの領域へと、パウロの領域へと熱心をもって導こうとしておられる神様のことを覚えたいと思うんです。

そして、自分のことも、他者のことも、短絡的に、単発的に裁くことを聖霊の助けによって自制出来ればと願うわけです。

神のなされることは知り尽くしがたく、極めがたく、底知れない深さがあります。

お祈りいたしましょう。

祝祷：ローマ書 11 : 33